

2022年7月17日 主日礼拝

説教題「笑いの陰で流される涙を、主は」創世記 21 章 9～21 節

主任牧師 加藤 誠

「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱きしめてやりなさい。」(創世記21章17-18節)

先日の国政選挙のあと、落選したある候補者の言葉を新聞で読みました。この候補者は障がい者や性的少数者の思いを国会の場に反映していきたいと立候補したのですが、「僕らが今の社会に感じている『生きづらさ』を争点にしようとしたけれど、多数派の人びとには顧みてもらえなかった。選挙期間中に当事者の声を聴く機会が増え、『なぜ政治はこの人たちの声を聴いてこなかったんだ』という思いがさらに強くなっている」と。つまり障がい者や性的少数者の人が抱えている「生きづらさ」の声を社会全体が耳を傾けて受け止めていく。そして彼ら彼女らが「どこにでもいるふつうの一人」として「生きやすい社会」を目指すことは、社会のみんなにとっても「生きやすい社会」になるはずだと訴えたけれども、多数派の人たちには自分のこととして理解してもらえなかったということのようです。

人間が形づくる社会には必ず「多数派」と「少数派」が生まれ、両者の間には多くの場合、衝突が起こります。その衝突が良い対話の機会になり、人間として新たな気づきを与えられていく機会になると良いのですが、多くの場合は、多数派が少数派を無視したり、力づくで抑え込み、少数派の人たちの心を踏みにじるが行われていくことが多いのです。

聖書はイスラエル民族中心の書物です。なぜイスラエル民族が神さまに選ばれたのか。それは、世界の中でも「最も小さくて力の弱い民」の代表として神さまの憐みを証しするためだったのですが、途中からイスラエル民族の選びが絶対化されて「選民思想」が強くなり、旧約聖書では他民族への排外的な姿勢が非常に強くなっていきます。それが新約聖書のイエス・キリストによって、イスラエル民族だけではない「すべての人びとへの神の愛」が示され、最後の黙示録ではイスラエルの十二部族だけではない、すべての国、民族、種族の人びとが天のエルサレムでの礼拝に招かれていくビジョンが示されていくのです。

そういう意味で、神の御心は世界のすべての人びとを礼拝に招くビジョンにあるわけですが、残念ながら人間たちは神の御心を大切に受け止めることができず、神の心を痛め続けてきた歴史。それが聖書の歴史であると言えるかもしれません。

今朝、ご一緒に読んだ創世記 21 章も、その典型的な箇所の一つだと思います。ここには、アブラハムとサラ夫妻というイスラエル民族の喜び、笑いが描かれる一方で、その喜びと笑いからはじき出され、涙を強いられているエジプト人のハガルと、その息子イシュマエルの姿が描かれています。

アブラハムとサラは、長い間待ちに待った約束の男の子が誕生して「イサク」(笑い)という名前を付けます。二人がどれほど大きな喜びと笑顔にあふれていたかが伝わってくるようです。ところが夫婦には、その大切な息子イサクの前に、エジプト人の女奴隷ハガルを通して与えられたイシュマエルという息子がいました。神さまが必ず息子を与えるとの約束を待ち切れずに、妻のサラが「女奴隷ハガルを通して子どもが与えられる道を選んでください」と提案して誕生したのがイシュマエルでした。ところが、サラは「あの女ハガルと、あの子イシュマエルを追い出してください。あの女の息子は、わたくしの子イサクと同じ跡継ぎになるべきではありません」と言い始める。たぶんそこには、女奴隷ハガルがエジプト人であったことも大きな要因であったと想像されます。エジプト人の血が混じったイシュマエルがイスラエル民族の父となることはふさわしいことではなかったからです。

アブラハムは妻サラの言葉に苦悩しますが、翌朝、パンと水の革袋をハガルに渡して、その子を背中に背負わせて荒れ野に送り出します。それは「お前たちは邪魔だ。死んでくれ」というのに等しいものでした。自分たちが苦しい時にはエジプト人の女性にすがりながら、自分たちで何とか跡継ぎを確保できる目途が立った途端、ハガルを邪魔者として追い出す。なんと自己中心的で残酷な主人夫婦でしょうか。

けれども、そのような時においても、主なる神のまなざしはハガルとイシュマエルにも注がれていました。息子を灌木の下に寝かせて「わたしは子供が死ぬのを見るのはしのびない」と言って、しばらく離れたところで声を上げて泣くハガルに、神さまは御使いを送られるのです。「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱きしめてやりなさい」と。

この「お前の腕でしっかり抱きしめてやりなさい」という言葉は、聖書の中でも最も神さまの深い慈しみを感じる言葉の一つです。母親にとって、自分の子どもが死んでいくのを見なければならぬことほど辛いことはないでしょう。「神さま、どうしてあなたは主人夫婦の理不尽をお咎めにならないのですか?」「神さま、わたしたちの存在は、あなたのまなざしの中に認められていないのでしょうか?」。ハガルにとっては、自分たちがこの地上で生きることを意味を問う、根源的な問いがそこにあったはずです。そのハガルに、神さまは「お前の腕でしっかり抱きしめてやりなさい!」という言葉をもってお答えになったのです。

私たち大井教会は、どのような礼拝のビジョンを、神さまが祈り願っておられる礼拝として思い描いていくのでしょうか。「誰の言葉」を、「誰の神さまへの訴えの言葉」を聴いていくのでしょうか。今日、いろいろな生きづらさを抱えて生きる一人ひとりに「しっかり抱きしめてやりなさい」と語り掛けておられる主なる神の言葉を共に聴いていく私たちでありたいと思うのです。